

## 「木屑録」記

正岡子規の「七草集」は最終的に、漢詩、漢文、俳句、謡曲、論文、擬古文という七種類の文体でまとめた文集となった。

金之助は、その中でも漢詩、漢文の巻に興味をいだいた。

いや、それは興味というより、金之助の中であえて封印していた漢詩、漢文の世界がよみがえったというべきであろう。

兄、大助の忠告、友、米山保三郎のアドバイスもあって、金之助は漢詩、漢文の世界に身を置くことを断念した。

一度は、その世界で生きて行くことを真剣に考えたほどだから、創作した漢詩、漢文は金之助が置き去りにしていた世界を鮮やかに呼び戻してくれた。

だから、感想を七言絶句にして綴ったのである。

同時に、友人が創作した文集は、金之助に何かを自分の文体で表現してみたい、という創作意欲を目覚めさせた。

夏休みになると、子規は静養を兼ねて故郷、松山に帰省した。

金之助は夏の初めに、兄の直矩の転地療養に同行して、静岡の興津へ出かけた。

天気も良く、暑いほどで、金之助は海水浴などをして過ごした。

その間中、金之助は「不二」の山の姿や、兎走る海原を眺めては、自分が子規のように目の前の海景、山景を文章にすれば、どのような文体で書くのだろうかと考えることがあった。

8月に入ると兄の直矩を残して、金之助は帰郷した。

友人との約束があった。房州、上総、下総と旅行をしようという約束だった。

8月7日、風が強かったが、東京の霊岸島から船に乗り、東京湾を南へ向かい、保田に上陸した。

数日、保田に滞在し、海に入ったり、海岸を散策した。

友人と4人の旅には東京では得られぬ開放感があり、鋸山に登って東京湾を眺め、対岸の相模の丘陵、そして、さらに彼方に富士山が望めた。

夕食も賑やかだった。お友達は夕食後も歌を歌ったりして楽しんでいたが、金之助は1人になり瞑想にふけったり、昼間眺めた風景を思い出したりした。その後、南房総を徒歩で横断して小湊に出て、鯛の裏、東金、銚子へと赴き、利根川を船で野田へ北上し、江戸川を南下し、全行程90余離（約360キロ）の夏の旅を終えた。

全行程90余離、24日間の夏の旅は、金之助に初めて、彼の文体で文章を書く意欲を与えた。

8月30日に帰郷すると、金之助はすぐに今回の、旅行記（漢詩）を書きはじめた。

だが、子規の「七草集」のように友人たちにそれを回覧して欲しいという気持ちはなかった。

房総の旅への出発の日、松山に帰省している子規に手紙を投函し、興津に滞在中の折のこ

とを漢詩にまとめて末筆に添えた。

それと同じように房総の旅を漢詩を軸にして旅行記にしようと思ったのである。

風穩波平七月天	風穩やかに波平かで七月の天
稱光入夏自悠然	稱光夏に入って自ら悠然
出雲帆影白千点	雲を出でし帆影白千点
総在水天髣髴辺	総べての水夫髣髴の辺に在り

このような叙景詩を、旅の風景を蘇らせながら綴って行った。

「木屑録」と題された旅行記は、金之助が初めて創作したまとまったものである。

しかし、これはたった1人の読み手のために創作された作品であった。

読み手とは、勿論子規こと正岡常規である。

文章のそこかしこに子規を意識して語られたものがあり、漢詩、漢文も子規にしか理解できない、これまで書簡を通して、お互いが2人っきりの間で披露している言葉がある。

それでもなお、この「木屑録」には、金之助がのちに作家、夏目漱石として次々に発表する小説の気配と思想が十分に読みとれるのである。

たった1人の読み手のための作品だが、金之助が他人に向けて初めて書いた文章であることは間違いなかった。

しかも金之助は、この作品を書いた者の名前として「漱石」を使った。

「木屑録」はなんと10日で仕上げている。

金之助はこれを松山まで静養している子規のもとへ送った。驚いたのは子規である。知らぬまにこれを金之助君は書き上げたのか。これは尋常ではないぞなもし。

子規の「木屑録」への賛辞も尋常ではなかった。